

中世日本の対外貿易と特産品

Local products sold in foreign trade in medieval Japan

榎本 渉

ENOMOTO, Wataru

国際日本文化研究センター

(International Research Center for Japanese Studies)

Abstract

Japanese trade goods exported to China during the Southern Song period (1127–1276) included gold, mercury and sulfur as mineral resources, and pearls, medicine, foodstuffs and timber as mountain and sea resources. Many of these exports, such as gold from Mutsu, sulfur from Satsuma-Iojima Island and Bungo, timber from Suo, and pearls and mercury from Ise and Shima, were specialties available only in specific places in Japan. As controlled trade receded in late Heian Japan and the kemmons (influential houses) began to conduct their own trade, the Chiten (the headship of the imperial house), Taira clan and Kamakura shogunate began to influence these localities where the traded goods were originating.

要旨

南宋時代（1127～1276）の中国に輸出された日本の貿易品には、鉱産資源として金・水銀・硫黄があり、山海の産物として真珠・薬品・食材・木材があった。陸奥の金、薩摩硫黄島および豊後の硫黄、周防の木材、伊勢・志摩の真珠・水銀など、これら輸出品の多くは日本国内でも特定の場所でしか入手できない特産品だった。平安末期の日本で管理貿易が後退し、権門が独自に貿易を行なうようになると、治天・平氏・鎌倉幕府等がこれら特産地に影響を及ぼすようになった。

1. はじめに

中世日本の経済は、対外貿易と密接に関連していた。そのことをもっとも顕著に示す事実として、鎌倉時代の通貨流通がある。日本では10世紀以後皇朝十二銭の発行が途絶えたが、平安末期の12世紀後半から宋銭の輸入が始まった。その流通範囲は拡大を続け、鎌倉後期には米・絹等の現物貨幣に代わり、日本列島の基軸通貨となった。これら宋銭は日宋・日元貿易によってもたらされたものであり、日宋・日元貿易は日本経済の大枠を定めるほどの影響力を持ったことができる。

輸入品は他にも様々なものが挙げられる。その中には文化財としての書画・典籍・工芸品の類もあり、高価で取引されたが、全体に占める割合としては陶磁器・絹織物・南海産香薬などの消費財の方が大きかったと考えられる。むろん陶磁器や織物にも質の高低はあり、武将の威信財や寺院什物とされた高級品は存在するが、ここで念頭に置いているのは生活の中で使用・消費されることを前提とした商品である。一部の限られた特権階級のみが輸入品に触れる時代ではなくなったのが中世であり、その意味でも宋銭は中世的な輸入品の代表と評価できる。

これら輸入品の代価となった輸出品には刀剣・漆器・扇・屏風・銅器・紙など工芸品もあったが、規模の面で中心を占めたのは、鉱産物や山海で採取される動植物など、特定の地質・生態系下で得られる特産品の類である。たとえば戦国時代後期から江戸時代初期にかけて日本の経済的活況を導いた銀は、本共同研究「日本文化の地質学的特質」で調査地とした石見銀山を特産地の一つとした¹。中世日本の経済を理解する上で、特産品・特産地は重要な問題である。有力者たちは輸出品を安定的に確保するためにしばしば特産品の生産・流通に関与するか、特産地を政治的影響下に置いた。

もちろん中世日本の輸出品は銀に留まるものではない。むしろ銀山開発は16世紀に海外の銀需要の高まりを受けて本格的に始まったところがあり、15世紀以前には輸出品としてさほどの存在感はなかった。しかし15世紀以前に見られた他の輸出品の多くも、やはり特産品であった。本稿では先行研究の指摘も踏まえつつ、特に平安～鎌倉時代の代表的な輸出品にどのような特産品があったかを確認し、さらにその特産品と有力者の関係を略述することにした。

2. 日宋貿易における輸出品

日宋貿易における輸出品の品目については森克己やシャルロッセ・フォン・ヴェアシュアの整理があり(森, 2008; シャルロッセ, 2011), 個別研究も少なくない。ただし輸出されたもののすべてを取り上げれば, その範囲は非常に広がり, 議論も雑駁になりかねない。たとえば高宇泰『敬止録』巻20, 貢市考上に引く佚書『永樂寧波府志』(永樂年間〔1403～24〕初期に成立)には, 明代(1368～1644)初期の中国に輸出された日本の商品が, 実に248種も挙げられている(中島, 2003)。その全体を検討するのは多大な字数を要することもあり, 本稿では南宋時代(1127～1276)の中国で日本の代表的な輸出品と考えられた商品を中心に確認することにした。

紹定元年(1228)成立の『宝慶四明志』^{ほうけいしめいし}巻6, 郡志6, 叙賦下, 市舶には, 慶元(今の浙江省寧波)の輸入

品の品目を列挙する箇所がある。日本の商品は細色(重量当たりの価値が高いもの)に「金子・砂金・珠子・薬珠・水銀・^{ろくじょう ぶくりょう}鹿茸・^{そしき}茯苓」があり, 麤色(重量当たりの価値が低いもの)に「^{らとう ごうしん}硫黄・螺頭・合蕈・松板・杉板・羅板」があった。金子と砂金はともに金で, 形態によって区分したものでしょう(金子はインゴットか)。水銀と硫黄は現代の水銀・硫黄と同じである。以上は鉱産物に属するものである。また山海での採取品もある。珠子は真珠で, 薬珠は特に薬用に用いる真珠²。鹿茸は鹿の角で, 薬として用いる(『大観本草』巻17, 獣部)。茯苓・合蕈³はそれぞれ薬用・食用のキノコである。松板・杉板・羅板はいずれも板に加工された木材。松・杉は現代の松・杉と同じもの。羅は羅とも書き, ヒノキを指すと考えられる(榎本, 2008: 8～9)。なお中国にヒノキは自生せず, 漢字の「檜」も中国ではヒノキではなくジャクシンを指す。

最後に少し検討を加えておきたいのが螺頭である。「螺」は巻貝を意味し, 「頭」は接尾語。森克己は藤田豊八の説に依拠して貝殻とし(藤田豊八, 1932: 494〔初出1918〕, 森, 2008: 198〔初出1948〕), これを螺鈿細工の材料と理解した(森, 2009: 55〔初出1963〕)。以後の研究の多くもこれに依拠する。だが藤田明良は螺頭を貝肉と考え, その根拠として宋末の包恢『^{ほうかい へいそうこうりやく}敝帚藁略』巻1, 禁銅錢申省状を挙げる(藤田明良, 1996: 7)。包恢は日本からの輸入品について, 螺頭は宴会に必要なものだが, 無くても五穀がないほどの問題ではないとしている⁴。たしかに五穀と対比される螺頭は食品と見るべきだろう。長距離輸送・長期保存に供するために乾燥した貝肉と考えられる⁵。元初の周密『武林旧事』巻6の市食の

2 廉州(今の広西壮族自治区にあり)や塘梁(今の河北省にあった湖)の特産の真珠が宋代の本草書で薬品として挙げられており(『大観本草』巻20, 虫部), 日本産真珠の一部も薬用に用いられたと考えられる。

3 先行研究に合蕈を合蕈の誤として筵と解釈するものもあるが, 浙江省台州で採れるキノコを列挙した南宋・陳仁玉『菌譜』の冒頭に合蕈が立項されていることを考えると, あえて誤字を想定する必要はない。

4 原文は脚注7を参照。

5 なお『宝慶四明志』は高麗からの輸入品一覧で「螺頭」「螺鈿」を並列しているから, 螺頭は工芸品としての螺鈿とは別のものと考えられる。また南方(海南島・占城・西平州・泉州・広州)の船による輸入品一覧には, 巻貝

1 最近の研究成果として, 本多(2015), 鹿毛[編](2021)を挙げておく。

糸に挙げる浙江省杭州の外食メニューの一つに螺頭があり、日常的な食材として消費されたことが知られる。日本産の貝肉も珍味として宋人の食膳に供されたのであろう。また巻貝の貝肉には、目薬の材料としての用途もあった事が知られる（『大観本草』巻22, 虫部, 海螺）。

以上をまとめれば、13世紀日本の輸出品には、鉱産資源として金・水銀・硫黄があり、山海の産物として真珠・薬品・食材・木材があった。この中、南宋で特に重視されたのは何だったか。まず宝祐6（1258）年に比定される慶元の沿海制置使呉潜の奏状（『開慶四明統志』巻8, 蠲免抽博倭金）に、倭商が慶元にもたらす商品では倭板・硫黄だけが国計の助けとなり、その他に倭金も取引されていると述べられている⁶。また同じ頃（1250年代）に書かれた包恢『敵帚藁略』巻1, 禁銅銭申省状は、輸出禁制品の銅銭が日本に流出していることを問題視し、日本船がもたらすのは板木・螺頭等のつまらないものばかりなので、軍需に供する硫黄だけ取引を認めることにすれば、来航する船も減少するだろうと述べる⁷。呉潜の挙げるものと比べると、硫黄・木材は共通するが金は無く、代わりに螺頭が加わっている。13世紀半ばの日宋貿易では、硫黄・木材が最重要輸出品で、ついで金・巻貝があり、呉潜・包恢の言及しない真珠・水銀・薬品等はより重要性が落ちると考えられていたらしい。

金は9世紀後半以来11世紀前半まで、朝廷による官貿易の代価として支払われてきた（渡邊, 2012a）。官貿易代価は後に九州諸国の官物に変更さ

の貝殻と見られる「螺殻」がある。これと表記の異なる「螺頭」は貝殻ではないと考えるべきだろう。

6 「照得、倭商毎歳大項博易。惟是倭板・硫黄、頗為国計之助。外此則有倭金。商人携帶、各不能数両、未深深藏密匿、求售於人」。

7 「倭船之主抽解之場、初不過板木・螺頭等潑物耳。而使之得以博易吾銅錢而歸、是猶以土而博吾之真金、以石而博吾之美玉、利害本非難見。螺頭僅可以供燕飲之需、雖無之、未至如（「無」脱力）五穀之養生、板木不知濟何等急切之用、雖無之、未至如無棺木之送死、豈不可禁絕其来乎。惟硫黄可供軍需者、許其博易抽解、則舶之来者必少、而錢之泄者亦少。聞之、每歲往来不下四五十舟、乃無非木板・螺頭等物。而坐聽其空竭吾国家之重宝、豈不悞哉」。

れたが、『宝慶四明志』からは、13世紀になっても商人たちが貿易品として金を取引し続けていたことが分かる。13世紀末、マルコ・ポーロがジパングに豊富なものとして金や真珠を挙げているのは、元に輸入されていたためである（『世界の記述』）。硫黄は火薬原料として宋代に需要を増し、10世紀以後盛んに輸出されるようになった（山内, 2009）。木材は、宋の南遷（1127）以後の浙江の木材資源枯渇を背景として、日本から輸入するようになった。浙江の人口増加に伴う薪炭需要の増加や、造船・建築用の木材伐採が原因だったと考えられる（岡, 2012）。

3. 輸出品の特産地

ここまでで見た輸出品の多くは、日本国内でも特定の場所でしか採れない特産品である。たとえば金は陸奥、硫黄は薩摩硫黄島および豊後、木材は周防⁸、真珠・水銀は伊勢・志摩で入手できた。これらの特産地は、平安末期に相次いで治天（院政を敷いた上皇および親政を敷いた天皇）や平氏の影響下に入っていく。平安前中期には、陸奥国や大宰府など地方官を通じて確保した官物を用い、大宰府や海国司の管理下に官貿易が行なわれたが、12世紀には貿易管理体制が後退し、有力権門が個別に宋海商と関係を持つようになる。その過程で貿易に関与する権門により、貿易品の特産地に関心が向けられるようになったと考えられる。たとえば陸奥・出羽には、5ヶ所の摂関家領荘園が設けられたが、これらは保元の乱（1156）で後白河院（1127～92）に没収された。その年貢は奥州藤原氏の管理下に、京都に進進された（五味, 1988）。木材産地の周防は、一時期後白河院の院分国（院が国司を推挙できる国）だった。後白河院は近臣を国司に任じて、木材を南宋慶元の名刹阿育王山に送らせたことが知られる（渡邊, 2010）。後白河院は金と木材という輸出品の産地を抑えていたのである。

8 石見の木材が鎌倉時代から京都や九州に流通していたことや、唐船が石見に来航したことがあったことから、西田友宏は石見の木材も貿易品に用いられた可能性を指摘している（西田, 2018）。旧石見国の港湾遺跡である島根県沖手遺跡・中須西原遺跡・中須東原遺跡では、平安・鎌倉時代に遡る中国製陶磁器等も多く出土している（村木, 2021）。

京都と院の所領をつなぐ遠隔地商人は、治天の下にある院御厩司によって統括され、院御厩舎人の身分を与えられた。鳥羽・後白河院政期（1129～92）に院御厩司の責任者（別当）の地位にあったのが平氏だった。たとえば『平家物語』には、平重盛（1138～79）が家人の平貞能に命じて陸奥の金を阿育王山に送らせた説話があるが、重盛は院御厩別当、貞能はその下の案主の地位にあった（渡邊，2010）。この説話の前提には、院御厩司の責任者の地位にあった平氏が院領年貢である陸奥の金を管理していた事実があると考えられる。いわゆる「平氏の日宋貿易」と言われるものも、平氏の院政との密接な関係を前提としたものだった（渡邊，2012b, c）。

硫黄島は平安末期に有力権門が直接掌握していた形跡はないが、『平家物語』には肥前国鹿瀬荘（平清盛弟の教盛の荘園）から硫黄島に到る船便が登場する（覚一本巻2，康頼祝言）。肥前から薩摩にかけての九州西海岸の海上交通は、1167年頃には後白河院と平清盛（1118～81）によって掌握されており（小川，2016），硫黄島から九州への硫黄搬入路は院と平氏の影響下に置かれていたと考えられる。平氏との関係が特に強かったと考えられる特産品に水銀・真珠がある。これらの特産地である伊勢・志摩は11世紀初頭の平維衡以来、平氏の拠点だった。

以上の特産地の掌握状況は院政期を通じて形成されたものだが、後白河院政期（1158～92）に完成を見てから、長続きすることはなかった。1185年の平氏滅亡と1221年の承久の乱という政治変動以後、貿易品特産地の多くは関東御領や北条一門の所領として鎌倉幕府の影響下に置かれたと見られる。たとえば陸奥の金は1189年の奥州藤原氏滅亡後に鎌倉幕府が掌握したと考えられ、また水銀の産地である伊勢国丹生山は承久の乱後に北条氏一門が地頭職を掌握した（大塚，2022）。

1298年に得宗の北条貞時（1272～1311）およびその周辺の人物（祖母の葛西殿，母の覚山尼，女婿・従兄弟の北条師時の父宗政の菩提寺である浄智寺）が僧侶に託して元に送った物品のリストには（『青方文書』70～73），刀剣・甲冑・蒔絵などの工芸品や衣服・織物以外に、砂金・円金まどめかね・水銀・真珠があった（村井，2013：188～190）。砂金・円金は『宝

慶四明志』の砂金・金子に当たるだろう。これらは工芸品や織物とともに贈答や取引に用いられたと考えられる⁹。ここからは、鎌倉幕府中枢の人々が貿易品として金や水銀・真珠を確保できたことが分かる。ただし木材のように鎌倉幕府の関与が明確でないものもあり、輸出品が鎌倉幕府の影響下にあったことを前提にすることはできない¹⁰。金・水銀・真珠も、北条一門所領の得分として獲得したものかはおおよそ考の余地がある。たとえば水銀産地の丹生山は北条氏領ではあっても、傍流の時房流北条氏の所領とみられ、必ずしもただちに得宗関係者の手に入るべきものではない。一門間の融通も考えられるが、市場の流通品から入手したものが含まれていた可能性もあるだろう。

4. おわりに

以上、本稿では中世日本の輸出品としての鉱産資源・山海産物と、その特産地を確認してきた。鎌倉時代では硫黄・木材・金・巻貝などが特に重要な輸出品であり、他に真珠・水銀や薬品の輸出も見られた。そして院政期には治天や平家一門、鎌倉時代には鎌倉幕府の有力者らが、これらの多くを掌握していた。有力権門が個別に対外貿易に関与した院政期・鎌倉期には、彼等有力権門が貿易品特産地の掌握に務めたと考えられる。それは必ずしも貿易だけを目的としたものとは言い切れないが、貿易も念頭に置くものだったことを否定することはできないだろう。

以上のような動向は、室町時代には変化を見せた。守護が地域権力として分国への支配を強めるととも

9 これらは海商の運航する船に乗り込んだ僧侶が持ち込んだ得宗関係者の権利品であり、船の積み荷全体に当たるものではない。船を運行する海商たちは硫黄や木材などかさばる商品も含めて扱ったが、個人で動く使僧の場合、扱える商品の重量は限りがあり、軽量で高価値なこれらの商品が託されたと考えられる。

10 周防木材は鎌倉初期より周防守に任命された東大寺大勧進が東大寺復興用途として獲得した。1240年には摂関家の九条家が周防の木材産地である上得地保を東大寺と交渉して入手している。九条家はその直後に木材を日宋貿易に用いた形跡がある（中村，2010）。これらについて鎌倉幕府の関与は確認できない。ただし西国の流通に対する鎌倉幕府の影響が強まった鎌倉後期には、状況が変化した可能性はある。

に、特産品への影響力を増していくのである。室町幕府が遣明船派遣に当たり、船に載せるための硫黄を薩摩の島津氏や豊後の大友氏に用意させたことは(伊藤, 2010), そのことを反映している。15世紀には銅の輸出が見られるようになり、16世紀には周知の通り銀の輸出が激増した。特に銀については石見銀山がブームの火付け役となり、各地の大名権力が活発な銀山開発を行なった。肥後相良氏は領内で銀の鉱脈を発見し精錬にも成功すると、1554年に船を建造して遣明船派遣を試みており(鹿毛, 2019), 領内の資源開発と海外貿易への進出が直結していた様子を知ることができる。しかし豊臣政権期以後、有力な鉱山は統一政権に接収されて直轄化された。地域権力による貿易を目的とした特産品開発は、ここに大きな制限を受けるようになったのである。

文献

- 伊藤幸司(2010):硫黄使節考。『東アジアを結ぶモノ・場』, 154-172, 勉誠出版, 東京。
- 榎本 涉 (2008):「板渡の墨蹟」から見た日宋交流。東京大学日本史学研究室紀要, 12号, 1-21。
- 大塚紀弘(2022):鎌倉大仏の鍍金と鎌倉幕府。日本歴史, 887号, 55-63。
- 岡 元司(2012):南宋期浙東海港都市の停滞と森林環境。『宋代沿海地域社会史研究 —ネットワークと地域文化—』, 427-452, 汲古書院, 東京。
- 小川弘和(2016):院政期の肥前社会と荘園制。『中世的九州の形成』, 117-145, 高志書院, 東京。
- 鹿毛敏夫(2019):遣明船と相良・大内・大友氏。『戦国大名の海外交易』, 11-44, 勉誠出版, 東京。
- 鹿毛敏夫[編](2021):『硫黄と銀の室町・戦国』。366ページ, 思文閣出版, 京都。
- 五味文彦(1988):日宋貿易の社会構造。『国史学論集』, 119-135, 今井林太郎先生喜寿記念論文集刊行会。
- シャルロツテ・フォン・ヴェアシュア(2011):『モノが語る日本対外交易史』。401ページ, 藤原書店, 東京。
- 中島榮章(2003):永楽年間の日明朝貢貿易。史淵, 140輯, 51-99。
- 中村 翼(2010):鎌倉中期における日宋貿易の展開と幕府。史学雑誌, 第119巻第10号, 39-63。
- 西田友広(2018):中世前期の石見国と益田氏。『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』, 23-36, 島根県教育委員会。
- 藤田明良(1996):中世「東アジア」の島嶼観と海域交流 —島嶼論への歴史学的アプローチのために—。新しい歴史学のために, 222号, 1-11。
- 藤田豊八(1932):宋代輸入の日本貨につきて。『東西交渉史の研究 南海篇』, 493-504, 岡書院, 東京。
- 本多博之(2015):『天下統一とシルバーラッシュ —銀と戦国の流通革命』。216ページ, 吉川弘文館, 東京。
- 村井章介(2013):日元交通と禅律文化。『日本中世の異文化接触』, 171-213, 東京大学出版会, 東京。
- 村木二郎(2021):陶磁器からみた中世益田。田中大喜[編], 『中世武家領主の世界 —現地と文献・モノから探る—』, 241-259, 勉誠出版, 東京。
- 森 克己(2008):『新訂日宋貿易の研究』。469ページ, 勉誠出版, 東京。
- 森 克己(2009):日宋貿易と鎌倉時代。『続々日宋貿易の研究』, 51-63, 勉誠出版, 東京。
- 山内晋次(2009):『日宋貿易と「硫黄の道」』。87ページ, 山川出版社, 東京。
- 渡邊 誠(2010):後白河法皇の阿育王山舍利殿建立と重源・栄西。日本史研究, 579号, 1-27。
- 渡邊 誠(2012a):平安期の貿易決済をめぐる陸奥と大宰府。『平安時代貿易管理制度史の研究』, 165-205, 思文閣出版, 京都。
- 渡邊 誠(2012b):十二世紀の日宋貿易と山門・八幡・院御廨。『平安時代貿易管理制度史の研究』, 275-311, 思文閣出版, 京都。
- 渡邊 誠(2012c):後白河・清盛政権期における日宋交渉の舞台裏。芸備地方史研究, 282・283号, 15-45。

